

# 深イ～話！

No.63

——「母の髪型」 株式会社勢乃國屋代表取締役会長 山中隆雄——

茶髪、金髪が珍しくもないようになってきた。

だが、ときたま、すごいのに出会うと思わず亡き母の髪を思い出してしまう。

母は昭和45年過ぎて、七十歳をこえても日本髪を結っていた。それは珍しい存在で、当時そんな髪型の女は一般には見るのがなく、また老いがすすむにつれ不似合さが増すようにすら思えた。

髪の毛の多い性で結いを解くと、その長髪は尻をこえて垂れた。おまけに綺麗好きで、髪を洗う機会はたびたびであった。

髪が長すぎるので、一人では洗えず、そのたびに姉や叔母が手伝う始末である。

母のすることにはあまり口を出さない私だが、つい口をすべらせてしまった。それには、「おしやれを気にする年齢ではない」とか、「従順な母がどうして髪にこだわる」とかの批判もあったが、他に「君の母さんの髪、ヘンな髪」と子供の頃よくからかわれたことへの気持ちも含めて・・・

「お母さん、他人に世話までかけてそんな髪、いつまでも結うとらんと、短く切ったら」と軽く言ったのである。

「そやなあ、私もそう思うのさ。けどな、この髪、お父さんが好きやったんさ。」

「……」

何も言えなくなってしまった。

十年も前に死んだ父が母には十分生きていた。その髪は本当に父が好きだったのかは知らぬが、愚直なまでに純真であった母の心にはその思いは染み込んでいたのだ。

“お母さんゴメン。一生その髪で……”

無言で詫びつつも、母の心が嬉しかった。



母は三十歳までに四人の子が授かったが、全部亡くなるという悲運に遭った。そんな耐え難い苦しみの中を、父と共にすごした母の父に対する思いは愛というよりも、深い敬になっていたように思う。

懸命に働きつづけた生前の母は、夕刻家に帰ると必ず髪に櫛を入れてから仏壇の前に座り、一日の報告を父に、の習慣をつづけた。

夫のみに尽くし切ったその健気な人生は、無我と無償の行為の連続であったように思う。

母に人としての喜びがあったのかと疑いたくなるのであるが、夫の喜びのみを喜びとできた古風で不思議な女であった。

母の髪は、亡くなったその日も美しく結われていた。